

利益をたたき出すトレードルールの作り方

5. 利益をたたき出すトレードルールを作る10の鍵

前章までで解説した3つのテクニカル指標は、それぞれ単独で使っても十分利益をたたき出すことができるものです。

この章では、更に優位性を高めるにはどうすればよいか、その方法を解説することにします。「利益をたたき出すトレードルール」を構築するために重要な項目を10個の鍵にまとめてあります。皆さんのオリジナルトレードルール構築のために、ぜひ活用して頂きたいと思えます。

第1の鍵「複数のテクニカル指標を組み合わせる」

テクニカル指標はそれぞれに特色があり、長所短所もあります。このセミナーで取り上げた3つの指標の長所短所をまとめると、以下のようになります。

	長所	短所
移動平均線	<ul style="list-style-type: none"> ● シンプルで広く使われていて、注目度も高い ● 特定のものはレジサポになりやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ● 急激な局面の変化に追いつかない ● これだけでは局面が分かりにくい場合がある ● 値幅の尺度にならない ● 時間的要素を加味できない
ボリンジャーバンド	<ul style="list-style-type: none"> ● 移動平均線がベースだから、別途これを必要としない ● 値幅の尺度になる ● 局面の判断が容易 ● トレンドの強弱が分かり易い 	<ul style="list-style-type: none"> ● 急激な局面の変化に追いつかない ● 時間的要素を加味できない
一目均衡表	<ul style="list-style-type: none"> ● 長短のトレンドが分かり易い ● 急激な局面の変化に追従できる ● 時間的要素を加味できる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 値幅の尺度にならない ● トレンドの強弱が分かりにくい

利益をたたき出すトレードルールの作り方

繰り返しになりますが、優位性のあるトレードを行う上で重要なことは次の4つの要素です。

- ① 局面の判断が容易
- ② 相場の周期が分かる
- ③ 値幅の尺度がある
- ④ 急激な相場の変化に追従できる

単独でこれらの4つの要素をすべて表示してくれるテクニカル指標はありません。しかし、2つの指標を組み合わせれば、4つ全てを表示させることが可能になります。

例えば、ボリンジャーバンドと一目均衡表の両方を使えば、①～④の全ての要素をチャート上に表示することが可能になります。以下はその使い方の例です。

- ① 局面の判断 → ボリンジャーバンドの形状と価格位置
- ② 相場の周期 → 一目均衡表の基本数値、各線の傾き
- ③ 値幅の尺度 → ボリンジャーバンドの各 σ ライン
- ④ 急激な相場の変化 → 一目均衡表の遅行スパン

なお、複数の指標を使うと言っても、4つも5つも使ってしまうと、判断に時間がかかりすぎたり、売買シグナルの発動頻度が極端に少なくなったりしますから、2～3種類までにとめておくべきでしょう。

第2の鍵「長短のタイムフレームのチャートを組み合わせる」

第2章で、長短の移動平均線を使ってトレンドを把握する方法を説明しましたが、この考え方を使って、長いタイムフレームのチャートで大局観を把握し、この大局観に従って、短いタイムフレームのチャートで仕掛けのタイミングと位置を決めることで、より有利なトレードを行う事が可能になります。

例えば、1時間足で局面の把握を行い、もし、その局面が上昇トレンド発生中と判断できれば、5分足チャートを使って「買いのみ」を仕掛ける、と言うトレードが可能になります。5分足単独で仕掛けるより、1時間足の大局観と一致した方向だけに仕掛ける様にすれば、トレードの優位性が高まります。以下のような組み合わせで様々なトレードスタイルに対応することが可能になります。

利益をたたき出すトレードルールの作り方

トレードスタイル	売買シグナル	大局観
デイトレード	1分足	60分足
	5分足	60分足
	15分足	4時間足
スイングトレード	60分足	日足
	4時間足	週足
ポジショントレード	日足	週足・月足

第3の鍵「時間的要素は必ず加味する」

第3章の一目均衡表の周期の項で解説した通り、相場は時間的な規則性の下で動いていますので、これを無視したトレードルールではなかなか利益を出せないでしょう。従って、売買シグナル発動条件には時間的な要素を必ず含めることが、より優位性のあるトレードルール構築のための必須事項となります。

例えば、上昇トレンドが最小基本数値である9期間継続していたとします。この上昇トレンドはそろそろ勢いを失う可能性が高い局面に差し掛かっていると言えます。従って、トレードルールを作る際、このような局面で他の買い条件が整っても、買いシグナルを出すべきではないと言えるでしょう。

実際には、この後も上昇が続くことが10回に3~4回ぐらいはあるでしょう。でも、それはそれで構わないのです。10回中6~7回トレンドが終了するのであれば、取りあえず、その局面では買いシグナルを出すのを控える。そして、押し目を付けたところで押し目買いを狙うようにルールを構築すれば、有利な局面だけに限定して買いシグナルを出すことになり、結果として、利益を積み上げることができるようになります。

また、上昇トレンドが9期間を越えて13とか14とか継続するとします。このようなケースは10回中1回有るか無いかの頻度で起こるものです。そうすると、ここまで上昇が継続したら、上昇トレンド終了の可能性が格段に高い局面になっていると言えます。ならば、逆張りの売りシグナルを出すチャンスかもしれません。こういう局面で、それまでのサポートを割ってきた、抵抗線にぶつかって陰線で引けた、などの条件を加えることで、逆張りの売りシグナルを出すルールを構築することもできるわけです。

更に、上昇トレンド終息の可能性のある局面は、もし買い玉を持っているのであれば、一部でも利食いをしておくことが、利益確保にとって重要です。利益確定のトレードルールとして使えるのは言うまでもありません。

利益をたたき出すトレードルールの作り方

第4の鍵「終値で判断する」

相場の局面を把握する上で極めて重要になる、支持抵抗線がブレイクされたかどうかの判定は、必ず終値で判断するようにします。

ほとんどのローソク足にはひげがついているように、相場ではオーバーシュートがつきものです。特に、1時間足以下の日中足では、米国雇用統計のような重要経済指標の発表の際に、瞬間的に支持抵抗線の高安値をブレイクしても、終わってみたら元に戻っていて、長いひげが残ると言う事は度々起こります。

例えば、もし、直近高値をブレイクして上昇トレンドが継続するなら、買いの勢いが続くわけですから、押し戻されて長い上ひげになる事はあまりありません。終値はその直近高値を上回った位置になるのが普通です。

従って、抵抗線である直近高値をブレイクしたかどうかの判定は、終値が確定するまで待てばいいと言う事になります。逆に、瞬間的な高値更新時に順張りで買って行くことは、まだ確定しないブレイクに賭けることになりすから、余計なリスクを背負い込むことになります。

上昇トレンドが続くのであれば、更なる上値でも利益確定ができるという事ですから、終値を待ってから買えばいい、と言う事になります。

この考え方を実践的かつ徹底的に活用する方法が次の第5の鍵です。

第5の鍵「ゾーンで仕掛けて、ゾーンで手仕舞い」

上の第4の鍵で述べたとおり、直近高値を終値で上回り、上昇トレンド継続と判断できた場合、どこで買うべきか、と言う問題があります。

この問題をうまく解決するには、ピンポイントで一括してドカッと買うのではなく、何回かに小分けにして、ある程度広がりをもったゾーンで買うことです。

まず、終値付近で成り行きで4分の1ほど買います。そして、その価格から上昇トレンドを支えるサポートライン付近までのゾーンで、残り4分の3を小分けにして指値で待ちます。そして、もし、終値でサポートラインを割ってしまったら損切です。

もちろん、この方法では全ての指値が約定する保証はありません。しかし、重要な抵抗線をブレイクした後は、ある程度の押し目をつけることが多いので、結果的に一括で買った

利益をたたき出すトレードルールの作り方

場合より、平均建値はかなり有利になります。同時に、損切時の損失金額を抑えることにもなります。我々個人トレーダーは自己資金でトレードするわけですから、この大切な資金をなるべく減らさない方法を採用すべきなのです。

利益確定も小分けにして行い、どこまで上昇するかわからない相場に出来る限りついでに行けるようにします。まずは、最初の抵抗線で半分利益確定し、残りはそれより上の抵抗線の下に指値を入れ、一部はトレーリングストップを設定します。また、最初の利益確定時には、同時にストップを買値のすぐ上に入れて、この時点で約定していない買い注文はキャンセルし、このトレードを勝ちトレードに確定します。

個人トレーダーがトレードで長く安定的に利益をたたき出すには、「終値で判断」→「ゾーンで仕掛け」→「ゾーンで手仕舞い」するのが、総合的に見て最も優位性を発揮する方法と考えます。

第6の鍵「トレンド終了から仕掛ける」

「相場の局面の推移を利用する戦略」に基づいてトレードを行う際、最も把握し易い局面は上昇もしくは下降のトレンドが発生している時です。これは初心者でも容易に判別できますね。

ですから、よくわからない局面から仕掛けるのではなく、上昇でも下降でもいいので、明確なトレンドが一定期間継続した後で、「調整の反落＝押し目」もしくは「調整の上昇＝戻り」と思われるところから仕掛けるのが最も失敗の少ない仕掛け方と言えます。

その中でも、ボリンジャーバンドのバンドウォークが発生している時が、最も分かり易いのです。1分足や5分足と言った短いタイムフレームでも、1時間足や日足などの長いタイムフレームでも、バンドウォークが発生している時のチャートは明確なトレンドが発生していることが一目瞭然です。

例えば、上昇トレンドが発生中であれば、ボリンジャーバンドは拡大し、また、 $+1\sigma$ もしくは $+2\sigma$ がサポートになっていることでしょう。また、一目均衡表であれば、転換線や基準線がサポートになっているでしょう。ですから、これらのサポート近くは押し目買いのポイントと判断できるので、押し目買いを狙う事が出来ます。

そして、いよいよサポートを割ってくると、それは局面の転換の可能性を示唆します。上昇トレンドが終わるのであれば、ボリンジャーバンドは急速に収縮し、収縮中は保合い局面となります。そこではボックス相場になるわけですから、レンジの上下限で逆張りの仕掛

利益をたたき出すトレードルールの作り方

けが有効になります。そして、再びボリンジャーバンドが拡大に向かえば、上昇もしくは下降トレンドへと局面が推移していくことになります。

この様に、局面の把握が容易なトレンド発生を利用し、相場の局面の推移に乗っていくのが、初心者であれ上級者であれ、最も失敗の少ない仕掛け方であることは間違いありません。これを繰り返すことで、相場の局面を把握する技術が身につく事になります。

第7の鍵「タイムフレームが出来るだけ長い足を使う」

第4の鍵でも触れた事ですが、1分足や5分足では、値動きが荒っぽい時には、支持抵抗線となっている高安値がブレイクされ、その後、ブレイクする前の位置まで戻ってくる事が度々起こります。重要な経済指標の発表時などでは、1時間足でさえも瞬間的にブレイクされることがあります。しかし、値幅の大きい4時間足以上では、そのようなことはあまり起きません。

また、長い期間の足は、それより短い期間の足を使っているトレーダーも重視することになります。たとえば、1時間足の突出した高値や安値は、それより短い足でも必ずそうなります。

そうすると、5分足だけの突出した高値をブレイクした場合と、1時間足での突出した高値をブレイクした場合を比較すると、これに影響を受けるトレーダーの数が格段に違う事になります。より多くのトレーダーが損切りに動けば、それだけパニックの規模が大きくなり、ブレイクした方向へ動きやすくなることは言うまでもありません。逆に、インパクトが小さければ、ブレイクは瞬間的なものにとどまり、押し戻されやすくなります。

例えば、支持抵抗線となっている重要な高安値更新からのトレンド発生を判断する場合、なるべく長い期間の足をつかった方が、より正確に判断できることを意味します。より正確な局面の判断ができるトレードシステムを作ることが、より優位性の高いトレードを行うための必須条件ですから、少なくとも大局観の把握には、なるべく長い期間の足を使った方が良いと言う事になります。

一方で、長い期間の足を使って売買シグナルを出すと、終値が確定するまでに時間がかかるわけですから、当然、売買シグナルが出る回数も減少します。たとえば、週足が確定するのは週に1回、月足だと月に1回ですから、数ヶ月間トレードチャンスが巡ってこないと言う事もあり得ます。また、期間が長くなれば、値動き幅もそれに比例して大きくなりますので、必然的に損切幅も大きくなります。

利益をたたき出すトレードルールの作り方

よって、デイトレードを行うのであれば、大局観を把握するためには日足以下、売買シグナル発動は1時間足以下でシステムを構築すると、信頼性とシグナル発動頻度のバランスが取れた良いシステムになると言えるでしょう。

第8の鍵「利益確定か損切りかは相場が決める」

既に、第1章から第4章までで、仕掛けの方法については解説しましたが、ここでは決済の方法、即ち、利益確定と損切のルールをどのように定めるべきかを解説します。

まず、トレードのプロセスはどうなっているか、もう一度整理してみます。

- ① 選択したテクニカル指標を使って局面を把握する
- ② それぞれのテクニカル指標と把握した局面に適した仕掛けを行う
- ③ 局面の把握が正しければ、マーケットは仕掛けた方向へ動くので、適切な位置とタイミングで利益確定を行う
- ④ 局面の把握が間違っていれば、マーケットは仕掛けた方向と逆に動くので、適切な位置とタイミングで損切を行う

では、具体例を上げて考えてみましょう。

- ① ボリンジャーバンドを選択し、ボリンジャーバンドが拡大し、+1 σ ラインをサポートに明確に上昇中であることから、上昇トレンド発生中と判断する。
- ② 価格がサポートの+1 σ 付近まで下がってきたところで押し目買いを仕掛ける。
- ③ 局面の把握が正しければ、サポートの+1 σ を終値で割らずに上昇するはずである。そして、サポートを割らずに上昇している限りは買い玉をホールドし、上昇が8~10期間続いたところ、もしくはサポートを終値で割ったところ、もしくはボリンジャーバンドが収縮を始めたところで利益確定を行う。
- ④ 局面の把握が間違っていれば、上昇しないか、上昇してもすぐにサポートを割ってしまうはずである。そして、終値でサポートを割ったところ、もしくはサポートを割らないまま8~10期間同じ状況が続いた時点、あるいはボリンジャーバンドが収縮を始めたところで手仕舞いをする。

ここで注意を払っていただきたいことは、上の③の利益確定も、④の損切も、トレーダーの判断と作業としては、全く同じことだと言う事です。つまり、サポートの+1 σ を終値で割り込む、同じ局面が8~10期間続く、ボリンジャーバンドが収縮を始める、という現象を手仕舞いの基準にしているわけです。

利益をたたき出すトレードルールの作り方

そして、いつ、どこで手仕舞いするかは、やってみないとわからないことだから、それは相場に任せていると言う事になるわけです。つまり、手仕舞いしたところが買値より上なら利益確定となり、買値より下なら損切となるだけです。これこそが「利益確定か損切かは相場に任せる」と言う事に他なりません。

ルールは単純明快です。「仕掛けた理由が消滅したところで手仕舞いを行う」だけです。そして、それが利益になるか、損切になるかは相場が決めてくれる、と言う事になります。そして、このことは同時に「局面の把握が正しいかどうか勝敗を分ける」と言う事にもつながっているわけです。

第9の鍵「機能する支持抵抗線を使う」

このセミナーで紹介した3つのテクニカル指標を使う際、期間を設定することになります。

使用しているチャートソフトに元々設定されている期間、即ちデフォルトの期間は多くのトレーダーがそのまま使っていることを考えれば、それなりに機能します。また、フィスコなどの投資情報会社が発表しているテクニカル指標で使われている数値を使うのも良いと思います。

重要なことは、デフォルトの設定であれ、自分独自の設定であれ、それらの指標を実際のチャートに表示して、果たしてそれらのテクニカル指標が機能しているかどうかを自分の目で確かめることです。

トレードで稼ごうと言うのであれば、まず、自分のツールが信頼できるに足るものであることが必須です。それをせずにトレードを行って、勝てない、勝てないと嘆いているトレーダーは、最初からトレードする資格がないと言う事になります。

では、どうすれば良いのでしょうか。それには、実際にチャートに表示して、自分の目で確かめるしかありません。もし、あなたが使っているチャートのテクニカル指標の設定を変えることができないのであれば、そんなソフトを使い続けるのはやめた方が良いでしょう。

第2章の移動平均線の解説で触れましたが、期間を短くすると、移動平均線はローソク足に接近し、長くすると乖離します。従って、ローソク足につかず離れず接近した線となるように設定すれば、それが短期移動平均線として機能している状態です。

利益をたたき出すトレードルールの作り方

また、普段は大きくかい離しているものの、ときどきはタッチする、というような設定にすると、それは中長期移動平均線として機能している状態です。

さて、こうして機能するテクニカル指標の設定ができたとします。でも、あなたがパソコンに向き合える頻度が1時間に1回なら、それより短い間隔で頻繁にタッチするテクニカル指標は何の意味もありませんよね？

従って、それぞれのトレーダーがチェックできる頻度と同じかそれより少なめの頻度でチャンスが来るようなタイムフレームのチャートやテクニカル指標の設定が必要であることは言わずもがな、と言う事になります。

第10の鍵 「ファンダメンタルズは無視せよ」

「ファンダメンタルズ」って何？これは、市場の外で起きていることを指します。

たとえば、株式市場で起きていることは、株価や四本値、出来高、売買代金、VWAP、上昇下降率・同幅などの諸データと、これらのデータを基に計算されるテクニカル指標の数値などです。

一方、株式市場の外で起きている事とは、経済指標の発表、企業の業績、政策・銀行金利変動、金融政策方針、天変地異、国際紛争、政変などです。市場内で起きることと比べると、市場外で起きていることはほぼ無限にあります。

相場で大きな動きがあるたびに、相場が上がった理由、下がった理由をあわてて調べる人がいますが、これらのファンダメンタルズ情報を得て何をしたいのでしょうか。それは、今後、相場が上昇するのか、あるいは下落するのかを考えたいのだと思います。

でも、私に言わせれば「そんなことは全く考える必要はありません」でおしまいです。相場がどうなるかを考えても分かりません。世の中には、相場を押し上げる要因と押し下げる要因が、常に両方存在しており、しかも無数にあるわけです。しかも、それぞれの要因は、短期的な影響を与えるものから中長期的な影響を与えるものまで様々です。

一体、どうやって特定の要因がその時々相場に影響を与えていると分るのでしょうか？分る訳がありません。経済記者やアナリスト達は、相場が上昇すれば、上昇する要因を記事に書き、下がれば下落する要因を記事に書いているだけです。

経済指標発表で一時的に相場が大きく動くことがあります。しかし、これが相場の本

利益をたたき出すトレードルールの作り方

来の流れを根本的に変えることはありません。相場が上昇しようとしている時に、ある経済指標発表のせいで、急に上昇するのをやめて、下落に転じる、と言った事はありません。逆に、上昇に寄与する発表が出れば、それがきっかけになって、相場が急上昇することはよくある事です。つまり、「発表が上昇の引き金を引いた」「上昇の触媒」になったと言う事です。

我々トレーダーに出来ることは、「相場がどうなれば、自分は何をするのか」を決めて、相場がそうなれば、決めた事を実施することです。たとえば、価格が抵抗線まで上昇し、そろそろ上昇トレンドも収束するタイミングであれば、戻り売りを仕掛ける。支持線まで下落し、そろそろ下降トレンドも収束するタイミングであれば、押し目買いを仕掛ける。これなら事前に考えることはできます。つまり、「相場が動いてから行動する」。これで十分なのです。